

平岡イオンの森のアオサギコロニーについての報告

はじめに

平岡イオンの森では、1997年以来、2019年現在まで23年間にわたり毎年継続して営巣が確認されています。しかし、コロニーは平地林にあるため外部からの観察が難しく、営巣状況の詳細についてはよく分かっていません。一方、2019年には江別にあった平岡と同規模のアオサギコロニーが消滅しており、現在、札幌圏のアオサギの生息状況は不安定な状態にあると考えられています。そこで、北海道アオサギ研究会では、札幌圏のアオサギ地域個体群を保全する上で、平岡コロニーの役割をあらためて明らかにしておく必要があると考え、今回、コロニー内部の詳細な調査を行うことにしました。

調査の内容および参加者

2019年11月1日、平岡イオンの森にあるアオサギコロニーで、巣数、営巣木（本数、樹種）、営巣範囲の調査を行いました。なお、今回と同様の調査は2002年と2010年にも行っており、今回の調査結果と比較しています。調査参加者は、北海道アオサギ研究会と平岡どんぐりの森から9名（両団体の重複含む）、建設環境研究所から2名、一般2名の合計13名でした。

結果および考察

1. コロニーの範囲

コロニーはイオンの森の北東端近くのカラマツ林を中心に位置していました。図1の赤線で囲った内側が今回営巣木を確認した範囲で、面積は約8,000㎡でした。ただし、この範囲の外縁にあつて他から離れて単独で位置する数本を除くと、営巣木の大半はオレンジ色の枠内に収まっていました。2002年および2010年の調査時と比べると、営巣範囲は外縁部で変化しているものの、中心はカラマツ林内にあつて同じ場所が利用されていることが分かります。



図1 コロニーの範囲の年別比較

2. 営巣木

営巣木の本数は合計150本で、針葉樹2種と広葉樹7種が利用されていました（表1参照）。このうちカラマツが全体の77%を占め、これにトドマツを含めると、全体の9割近くが針葉樹でした。また、1本の木にかけられている巣の数は、全営巣木のうち73%は1巣のみでしたが、残りの木には複数の巣があり、最大で6巣が確認されました。なお、2010年の営巣木は148本で、今回とほぼ同じでした。また、同年の樹種構成は、カラマツ113本、トドマツ17本、残りが広葉樹であり、今回の結果との間に大きな違いは見られませんでした。ただ、2010年は全営巣木のうち16本（11%）が枯死または枯死直前でしたが、今回は9本（6%）に減っています。これは以前に枯死状態であった木の多くがこの間に倒れたためではないかと考えられます。実際、前回に比べるとコロニーの林床に倒木が多くなった印象がありました。

表1 営巣木の樹種別利用本数と1本あたりの巣数別利用本数

樹種	利用本数	巣数別利用本数					
		1	2	3	4	5	6
カラマツ	115	81	13	3	1	1	
トドマツ	18	16	2				
コナラ	8	5	1			1	1
ハリギリ	2	1	1				
ハルニレ	1	1					
ミズナラ	1	1					
アカシア	1	1					
シラカンバ	1		1				
ドロノキ	1	1					
不明（広葉樹）	2	2					
合計	150	109	18	3	1	2	1

3. 巣数

巣数は、比較的ボリュームがあり巣の形を保っているものが174巣、巣材が少なく痕跡のように見えるものが27巣でした。他に落巣が7巣確認できました。今回の調査はアオサギのいない時期に行っているため、実際の巣の利用の有無は分かりません。しかし、アオサギの場合、特別な事情がない限り、営巣後に残っている巣のほとんどは利用されているとみなすのが妥当です。また、営巣を早く終えた巣の巣材は他の巣のアオサギに大量に抜き取られるため、シーズン後は少量の巣材しか残っていないことも多く、今回痕跡のように見えた巣でも利用されていた可能性は大いにあります。また、落巣も比較的形が整っているものは、その年に利用されていた可能性が高いと考えられます。以上のことから、正確な営巣数は特定できないものの、今シーズンは200つがい近くが営巣していたのではないかと推測されます。

4. 江別コロニー放棄の影響

札幌圏には平岡のほか、江別と篠路に同レベルの規模のアオサギコロニーがあります。このうち比較的近い距離にある平岡コロニーと江別コロニーは、2002年から2010年にかけて、巣数の変化が補完的である（図2参照）ことから、両コロニー間でアオサギの行き来があるのではないかと推測されてきました。ところが、江別コロニーが完全に放棄された今回は、同コロニーの減少分を平岡コロニーが補うといった補完的傾向は見られませんでした。実際、この後の調査で、江別コロニーを離れたアオサギのほとんどは篠路コロニーに移った可能性が高いことが明らかになっています。このように、江別コロニーが放棄されたことによる影響は、篠路コロニーで大きく、平岡コロニーへの影響はほとんどなかったか、あったとしても限定的だったと考えられます。

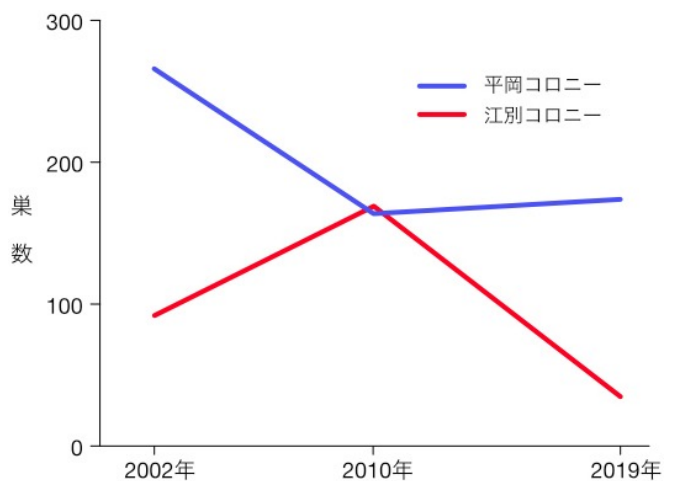


図2 平岡コロニーと江別コロニーの巣数変化

(注) 平岡コロニーの値は巣数、江別コロニーの値は実際の営巣数を示す。江別コロニーの2019年の値はシーズンを通しての最大値であり、この後、巣は全て放棄された。

4. 平岡コロニーの保全の重要性

江別コロニーが放棄された原因は、いくつかの状況証拠からみてアライグマでほぼ間違いないと思われます。そうであれば、江別コロニーと似た環境にある篠路コロニーについても、今後、アライグマの襲撃に遭う可能性は高いと考えられます。また、篠路コロニーは、今回アオサギの営巣数が大きく増えたことで、住宅等へのフンの被害が看過できない状況になっています。このように、篠路コロニーは将来にかけて安定した営巣地として存続できる保証はありません。この点、平岡コロニーは森の周囲がフェンスで囲まれているため、他の場所に比べてアライグマが侵入する恐れが少なく、また、フンによる被害も篠路と比べると少ないように見受けられます。さらに、2002年の調査で今シーズンより5割以上多い266巣が確認されていることから、コロニーのキャパシティにはまだ余裕があると考えられます。現在、札幌圏には、アライグマが侵入できず、同時に人とのトラブルが少なくて済むような環境はほとんど残されていません。イオンの森はこうした条件を満たす数少ない環境のひとつと言えます。近い将来、篠路コロニーが利用できなくなったとき、そこを離れたアオサギがイオンの森に移動してくる可能性は十分にあります。そうした将来起こりうる事態に備え、アオサギの営巣適地としてイオンの森を保全することは、アオサギの地域個体群を保護するという側面だけでなく、人とアオサギのトラブルを最小限に抑えるという観点からも、その重要性が以前にも増して高くなってきているといえます。